

経営目標 教育目標	【学校経営目標】 めまぐるしい社会の変化に対応し、自らの進路を切り拓く力を育てるとともに、地域に感謝し、社会に貢献しようとする意欲を持った生徒を育てる教育活動の推進 【学校教育目標】 主体的に学び 挑戦し 社会に貢献できる生徒の育成	めざす 生徒像	『夢・実現に向けて高い志をもち、絶えず努力し続ける生徒』 ・自ら意欲的に学習に取り組み、自らの未来に夢を抱きながら努力し続ける生徒 ・道徳、特別活動、部活動に主体的に取り組み、マナーとルールを重んじる生徒 ・体を動かすことをいとわない生徒 ・神石高原中学校の生徒として誇りをもつ生徒 生徒会目標「躍進」
--------------	---	------------	--

評価計画				自己評価					学校関係者評価						
中期経営 目標	短期経営目標	重点	目標達成の方策 (具体的な取組内容)	評価項目・指標	目標 値	時 期	達 成 値	評 価	達成状況	改善方策	評価			コメント	
											イ	ロ	ハ		
確かな 学力	1 学習意欲を 向上させ、 基礎学力の 定着を図る	1	(継続) 生徒の主体的な学習 を促す授業を展開し、 学習意欲の向上を図 る。	学び合いの形態を取り入れた 課題発見・解決学習を全教科で 行い、年に一回は各教科で校内 研究授業として実施する。	学び合いを通して、 学習意欲が高まったと 回答する生徒の割合 (アンケート数値)	80% 以上	中間	74%	B	2学期のアンケートでは、学び合いで「課題を見付けられる」84.0%、「自分から進んで学習をしている」91.4%、「もっと学びたいという気持ちになる」74.1%、「分からないと言える」91.4%という肯定的回答結果になった。	振り返りを生かした学びや学習のまとめなど、主体的な学習を生徒に紹介する。また、教員の失敗例・改善例を交流するなどして研修する。	○	○	○	評価は適正である。厳しく自己評価されている点はよい。改善方法も適切である。
							最終	71%	B	3学期のアンケートでは、学び合いで「課題を見付けられる」83.6%、「自分から進んで学習をしている」89.0%、「分からないと言える」91.7%、「もっと学びたいという気持ちになる」70.8%という肯定的回答結果になった。	先立校視察や相互授業参観、校内授業研修などを通して、神石高原中学校の授業モデルの確立が必要だと分かった。指導方法の工夫改善を今後も継続し、主体的に取り組める校内研修にする。	○	○	○	意欲の評価では、高まった姿を示しておくといよい。「学び合い」のよさを指標で表現できていない。評価は適正である。
		2	(改善) 多様な機会を設定・ 紹介し、自己決定させ ることで生徒のチャレ ンジ精神を養う。	各種検定試験、作文コンク ール、海外研修等の紹介を継続 的・計画的に行うことで、生徒 の意欲を喚起させる。	コンクールや各種検 定にチャレンジした生 徒の割合 (合格・入賞実績・ア ンケート)	80% 以上	中間	62%	B	コンクールに一回以上チャレンジした生徒の割合は95.3%だった。また、9月までの漢検・数検・英検の受験者延べ55名で合格者が34名でいる(合格率61.8%)。地理並びに地図作品展において、国土地理院長賞を受賞。	残念な結果がでた生徒に再受検の呼びかけやアドバイスを続けた。その結果、2学期に再チャレンジする生徒が増えている。全体への呼びかけと個別の対応を継続していく。	○	○	○	チャレンジ状況と合格率の2つの視点があるので一つにするか、評価方法を検討するといよい。
							最終	79%	B	年間を通して、コンクールに一回以上チャレンジした生徒は全校の95.3%。4月～2月までに一回以上検定試験にチャレンジした生徒は全校の55.8%だった。その生徒の中で複数回受験した生徒の割合79.1%、合格者59.6%。アンケート【失敗を恐れずチャレンジする】の各教科(定期試験)での達成度30%未満の生徒が各学年にいる状況がある。また、全国学力・学習状況調査結果では数学に課題がある。A問題と比べてB問題(活用問題)での達成度30%未満の生徒の割合が増えている。	全校朝会や授業でも生徒にチャレンジしてみようと呼びかけをしたり、受験希望の生徒にはアドバイスを続けた。その結果、23学期に再チャレンジする生徒が増えた。全体への呼びかけと個別の対応を継続していく。	○	○	○	チャレンジした人数で評価することが妥当である。取組は成功と言える。
	3	(新規) 各教科において達成 度30%未満の生徒を 0%に近づける。	各教科で達成度30%以下の生 徒の誤答状況等を分析し、それ を改善する手立てを講ずる。	定期試験、各種調査 の結果	5%未 満	中間	8.5%	C	2学期定期試験(期末試験)での達成度30%未満の生徒は、各学年の各教科を集計すると7.9%であった。以前に比べて達成度30%未満の生徒は減ったが、目標である5%未満には至っていない。	各教科で個々の生徒のつまずきを分析をして、教科間の共有・連携を行う。学習意欲を喚起しながら基礎的な知識・技能の習得にも意義を持たせるような方向での授業改善を進める。小中連携を進める。(研究会・研修会への参加)	○	○	○	評価指標の基準をあらかじめ示しておくといわかりやすい。どの状態を目指すのか、数値化しておくといよい。	
						最終	7.9%	C	2学期定期試験(期末試験)での達成度30%未満の生徒は、各学年の各教科を集計すると7.9%であった。以前に比べて達成度30%未満の生徒は減ったが、目標である5%未満には至っていない。	各教科で個々の生徒のつまずきを分析をして、教科内での再指導や指導内容・方法の改善を進める。また、引き続き教科間の共有・連携を行う。デジタル教科書のICT機器の活用など視覚的な支援を行い、つまずきを解消する手立てを検討する。	○	○	○	中間と最終で同じ生徒が30%未満で重なっていると思われる。躓きの解消へ向けて手立て通りに取り組んでほしい。	
	4	(改善) 中高連携を通して、 『夢・実現』に向けた キャリア発達を図る。	乗り入れ英語授業(T.T)部活 動、行事での交流を増やすこと により、上級学校への進学意欲 を高める。	中高連携校への進学 (希望)者の割合	60% 以上	中間	48%	C	乗り入れ英語授業(T.T)を9月末現在で39時間実施し、3つのクラブで部活動交流実施。10/21人が第一希望進路にしている。(アンケート【学習・進学意欲の高まり】の肯定的評価1学期末84.1%→2学期75.3%)	11月に本校文化祭で交流予定で、高校での取組を知る良い機会にしたい。英語授業(T.T)の進め方の見直しや、今後有益な内容と感じさせる場面を多く設定する。	○	○	○	プロセスと結果のずれがあることは残念である。取組を進め生徒にとってよい成果になるよう期待する。	
						最終	57%	B	乗り入れ英語授業(T.T)を2/15現在で87時間実施し、4つのクラブで部活動交流実施。57.1%が連携校へ進学希望である。(アンケート【学習・進学意欲の高まり】の肯定的評価1学期末84.1%→2学期75.3%→3学期76.4%)	11月に本校文化祭で部活動交流(吹奏楽合同発表・美術・書道作品展)ができた。英語授業(T.T)の進め方を見直し、今後役立つ学習内容と感じさせるように場面を設定した。	○	○	○	評価指標自体を検討した方がよい。連携によって将来を考えるきっかけとしてほしい。	
豊かな 心	2 社会に貢献 できる生徒 を育成する	1	(継続) ・地域に貢献できる生 徒を育成する。	学校だよりの中に生徒が地域 を紹介するコーナーを設けて、 月1回を目安に発行する。	地域のために自分は 何かをしたいとい 思う生徒の割合	80% 以上	中間	75%	B	「自分の住んでいる地域が好き」75.3%、「地域のために何かしていきたい」75.3%	1学期から調査・学習してきたことを文化祭等で発表・発信することでその内容を客観的に振り返る。	○	○	○	評価は適正である。地域の人との交流が大事であり、それが地域貢献につながっていると思われる。
							最終	76%	B	「自分の住んでいる地域が好き」75.3%、「地域のために何かしていきたい」76.7%	文化祭や次世代議会で発表することで地域の課題を明らかにしてきている。大きな課題であるが、他地域での取組や提言、地域の方の活動を知ることで自分事とさせていく。	○	○	○	中高連携等を活用してより広い視野を持って取り組んでもらいたい。
		2	(新規) ・自分の役割を果たす ことができる生徒を育 成する。	各委員会での特色を生かした ボランティア活動を計画・実 行する。	ボランティア活動後 の振り返りにおける、 自己肯定感の向上	80% 以上	中間	76%	B	「自分には良いところがある」74.1%、「自分の良さはまわりから認められている」69.1%、「努力すればだいたいのはできる」84.0%	各委員会毎の活動の継続、地域ボランティア活動への参加の呼びかけを行う。活動の様子や参加者の感想を紹介する。	○	○	○	さらに自己肯定感が高まるよう、役に立った実感や自己認識が深まるよう指導方法を工夫していただきたい。
	最終	74%					B	「自分には良いところがある」76.7%、「自分の良さはまわりから認められている」63.0%、「努力すればだいたいのはできる」83.6%	他校や他地域でのボランティア活動事例や活動の様子を学ぶことで今後の活動に生かしていく。	○	○	○	自分のよさは周りから認められているの数値が63%というのはさみしい。地域・保護者を巻き込んで展開してもらいたい。		
	2	(新規) ・自分の役割を果たす ことができる生徒を育 成する。	委員会や学級活動を通して、 一人一役を担えるよう活動を仕 組む。	自分の役割に対する やりがいの自覚	80% 以上	中間	90%	A	「自分がすべき仕事はやりきる」93.6%、「自分の役割にやりがいを持ち、適した言動をとる」86.4%	役割をやって良かった、みんなのためになった。「ありがとう」と言ってもらえた、そう感じられる振り返りや相互評価の場面を持つ。	○	○	○	評価は適正である。改善方法も適切である。生徒自身の自己評価が高まるよう継続してもらいたい。	
						最終	93%	A	「自分がすべき仕事はやりきる」97.2%、「自分の役割にやりがいを持ち、適した言動をとる」89.0%	役割をやって良かった、みんなのためになった。「ありがとう」と言ってもらえた、そう感じられる振り返りや相互評価の場面を計画的・意図的に持つことで自己有用感を育てていく。	○	○	○	自己有用感・自己肯定感の育成は成功しているといえる。評価は適正である。	
2	(新規) ・自分の役割を果たす ことができる生徒を育 成する。	日本一の校舎・環境整備を目 指し、きれいに掃除をするポイ ントを考えさせ、整理する。	掃除状況等の質的向 上	80% 以上	中間	81%	A	「心を込めて掃除をしている」85.0%、「きれいになるよう掃除方法を工夫している」77.8%	委員会毎による諸準備や清掃活動等は上級生のリーダーシップにより進んでやりきることができている。次の学年に次期リーダーとしての意識を持たせるとともに行動力を育てる。	○	○	○	掃除を通して、リーダー育成や学校への愛着・感謝の気持ちが醸成されるよう期待する。		
					最終	88%	A	「心を込めて掃除をしている」89.0%、「きれいになるよう掃除方法を工夫している」87.7%	自分で気づき、進んでやりきる行動力、他と協力してやるうとする協働力を日々の積み重ねの中で育てることを今後も目指していく。	○	○	○	掃除を通して、気づき、行動力、協働力等を育成することにつながっていると思えます。		

【自己評価 評価基準】
 A: 100% ≤ (目標達成)
 B: 80% ≤ (ほぼ達成) < 100%
 C: 60% ≤ (もう少し) < 80%
 D: (できていない) < 60%